

本日朝がたの積雪には少々驚きましたが、皆様を祝福するかの如く、天候も回復し、太陽の光がさして参りました。弥生三月、木々のつぼみも我先にと膨らみはじめ、生命の息吹あふれる季節となったこの佳き日、令和五年度長野県松本深志高等学校卒業証書授与式を挙げる運びとなりましたこと、まことに喜ばしく、日頃から本校に対しまして格段のご支援・ご高配を頂いております多くの皆様に衷心より御礼を申し上げます。

ただいま、全日制普通科三百十五名のみなさんに卒業証書を授与いたしました。

本日も列席の保護者の皆様、ご家族の皆様には、お子様のご卒業、まことにおめでとうございます。高等学校の全課程を終え、立派に成長されたお子様の姿をご覧になり、併せて入学時の様子や在学中のこと、場合によっては生まれた時のことなども思い起こされる中、日頃のご苦勞ご訓育がここに実り、今日この日を迎えられる感慨もひとしおのことと拝察いたします。

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。

本日皆さんは、この伝統ある松本深志高校における三年間の全日制課程を修了し、ご卒業の運びとなりました。まずは、皆さんのこの三年間におけるたゆまぬ努力と精進を褒め称え、将来に向けてのエールを送りたいと思います。皆さんにとって、この三年間は必ずしも順風満帆ではなかったかもしれません。幾多の悩みや失敗、挫折や困難、そして我慢を強いられる場面や時にはあきらめの念を抱いたこともあったと想像します。加えて、中学時代より引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、活動が制限された時期を過ごし、悔しい思いをしたこともあったかもしれません。しかしながら、皆さんが深志でのこの三年間で経験し培ってきた、自ら課題を解決していく能力や、その過程において仲間と調整し協働する能力、興味・関心・好きなことに対して追究し続けたいと感じたことなどは、これからの VUCA の時代と呼ばれる先行き不透明な時代において、生きる力として身についたであろうことを確信しています。そしてこの三年間においてそうした学びを続けることができたのも、いかなる時にも皆さんのことを絶えず気遣いながら支えてくださったご家族や周囲の方々がいたことを忘れてはなりません。無償の愛情でここまで育ててくださったご家族に、そしてお世話になった周囲の方々、仲間たちに、ぜひとも本日の喜びと、心より感謝の気持ちを伝えてもらいたいと思います。

さて、これからの社会について、VUCA の時代だとか先行き不透明な時代などと先ほど申し上げましたが、実際世界情勢を見てみますと、ロシアのウクライナ侵攻は二年が経過してもなお解決の糸口は見えず、中東情勢は益々混迷の度合いを深めています。地球温暖化はもはや深刻な自然環境の変化や災害の多発を引き起こし、加えて日本の社会情勢においても政治への不安や、経済においても株価の上昇の一方で一向に取まらない諸物価の上昇や続く円安といった不安も抱えています。さらに急速に進展する AI とどのように付き合っていくのか、各分野では試行錯誤が繰り返されているところでもあります。将来に向けて飛び立とうとする皆さんの中にも、いささか不安要素が多すぎると感じている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。これまでは何かあるたびに、保護者の

皆さんや学校の先生方が皆さんに寄り添い直接支援をして下さいました。本日より皆さんはそうした支援の枠組みから自立を遂げていかなければなりません。ましてやほとんどの皆さんはすでに十八才であり、成人年齢にも達していますので、国政参加権はもちろん、諸契約においても個人の責任で行っていかねばならない立場となっているのです。そうした立場に漠然とした不安を抱えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そんな皆さんに、昨年度十一月の終始業式に、私をご紹介した俳句を再度紹介させていただきたいと思います。当時は感染症の影響によりまだオンラインで終始業式を実施していましたが、スライドの写真により深志高校内にある扁額や絵画について紹介させていただきました。その中で、校長室に掲げられている、藤岡筑邨先生の一句を紹介させていただきましたが覚えていらっしゃるでしょうか。筑邨先生は本校の同窓生で、長年本校の教壇に立つ傍ら、作家として、俳人としても活躍された方で、昨年百歳になられ、今も俳句を詠んでいらっしゃいます。校長室に掲げられている句は「揚げ雲雀 母校は今も山を背に」という句です。昨年度の終始業式では、季語でもある上昇気流に乗って空に舞い上がる「揚げ雲雀」を深志生や深志高校の先生方にとらえ、同窓生の皆さんや深志高校の歴史が、深志高校のみんなを応援している句としてとらえました。この「揚げ雲雀」を本日の卒業生の皆さんにとらえて読むとどうなるのでしょうか。将来に向けて飛び立つ揚げ雲雀たち、しかしこれからも挫折したり困難に直面することはきっとたくさんあるでしょう。世の中も移り変わっていくかもしれません。しかし母校は変わらず雄大な北アルプスを背に凜として立ち続けています。苦しい時、時代に翻弄された時、この母校で学んだ生きる力、精神を思い出し、乗り越えていってほしい、そしてそれでも厳しくなったら、いつでも母校・地元に戻ってきてエネルギーを蓄えてください。そうすれば、また人生を切り拓く力が湧いてくるのではないか、そんな解釈が成り立つように思うのですがいかがでしょうか。どうぞ皆さん、卒業後も深志高校を、そしてみなさんの地元を心の駆け込み寺として、大いに活用して欲しいと思います。

最後に、今年の干支は、辰（たつ）年ですが、この干支にちなんで卒業生に一つの言葉を贈りたいと思います。私に向かって右斜め後ろ、二階の体育館ギャラリーを見てください。壁に一つの扁額がかかっています。「潜龍飛翔（せんりょうひしょう）」と書かれたこの扁額は、今から三十七年前、松本出身の書家、上條信山先生が揮毫され、今皆さんが集っている新しい体育館の完成にあたって、39回卒業生が寄贈して下さいました。「潜龍飛翔（せんりょうひしょう）」の「潜龍（せんりょう）」は、応援歌「敵何人ぞ」の一節、「潜龍雌伏のとき去りて」から二文字をとり、「飛翔」は、鯉職集会のもととなった登竜門伝説と、それをモチーフにつくられた賛歌深志百年の一節の、「龍門かけり舞えよとて」からヒントを得て、この四字熟語をつくり、上條信山先生にお願いして、書いていただいたということです。「潜龍飛翔（せんりょうひしょう）」とは、深淵に潜む龍が、時を得て、空高く天に飛びかけるという意味であります。まさに、深志を飛び立とうとする皆さんに対し、夢と希望を持って大きく飛躍してほしいという願いを込めて、はなむけの言葉にしたいと思います。卒業生のみなさんの人生に幸多かれと祈り、本日ご列席のみなさんに感謝を申し上げて、式辞といたします。